

◆概要説明

現在ノクターンノベルズさん（小説家になろうの18禁サイト）で連載中の拙著「恥辱に耽る者フィリス」という官能小説の中の一節の朗読依頼です。素人の趣味程度の駄文で商業的なものではありません。

URL <https://novel18.syosetu.com/n6653hc/>

この中の「EX06-B」露出奴隷「F_01」（外伝パート）というお話を女性一人での朗読でも堪え得る感じを目指して加筆修正したものです。

◆全体の演技・人物造形について

抽象的な表現になりますが、全体として、背徳感、後ろ暗さ、倒錯したエロスといった雰囲気を感じたいと考えています。

主人公の女性フィリスは二十歳頃を想定しています。

十歳頃から育ての親とともに魔物を討伐しながら各地を旅しており、剣や魔法の腕は超一流という設定です。

普段は鋭く凛々しい雰囲気ですが、本作中では既にオドーという名の男の策略の中におり、正常な判断力を欠いた発情状態になっています。

この時点ではまだ性体験はなく、性的な責めに対してはウブな反応を示します。ただし、官能小説なので台詞中の乱れ方はディフォルメで。

躊躇いながらも性欲に抗いきれず、いやらしいことをしたり、いやらしい台詞を喋ってしまう。その背徳感によって、さらに興奮してしまう変態性を持った女性として描いています。

台本より前のシーンは本編6話となっていますので、人物像や作品感がつかみにくい場合には、前述URLが参考になるかと思えます（必ずしもお読みいただく必要はないです）。

◆台本の表記に関する諸注意

1. 朗読作品ですが、台詞以外の地の文はあまり声を張らずに、声を落とし、静かに読み聞かせるような語りでお願いします。

理想としては、一人称の語り手である話者が、恥ずかしさを押し殺して語っているかのような雰囲気が出ると最高です（参考程度にお考えください）。

2. 「カギカッコ内は台詞であることを表します。
感情を込めて、地の文と明確に区別できるようにお願いします。
3. 台詞以外にも心情に寄った描写はカッコ（）書きで演技の指示あり。
4. 丸々1行分改行している所は、気持ち程度、間を取ってください。
大体で良いです。
5. 一つの文の中のブレスは可能な限り読点を打った場所をお願いします。
区切る場所によっては、違った意味に聞こえてしまうからです。
実際に発生してみて、どうしても読みにくい場合に限り追加してください。
6. 息の演技を入れて欲しい箇所は▲マークで指示をさせて貰いました。
台本中の指示にも書きましたが、何種類か指定があります。
▲飲▼…これは息というよりも息を飲む音です。
▲速▼…極端に短く速い連続した息。過呼吸のように大分興奮している。
▲深▼…深く大きく速い息。興奮して上がった息を必死で整えてる感じ。
▲喘▼…これは喘ぎ声混じりの息です。メインではないので抑え気味で。
これらの息演技は、本作では大体は間を取る目的も兼ねています。
その演技の裏で、作中のオドーというキャラが喋っているという体裁です。
また、これらは絶対入れて欲しい息であって、他の部分に息・ブレスを絶対入れるな、という訳ではありません。
台詞や感情の乗った地の文の中で、演技上自然に入ってしまう、或いは入れた方が雰囲気が出ると判断される箇所には気にせず入れてください。
7. 傍点「●」が振ってある部分は、特に強調して読んで欲しい箇所です。
朗読部分の演技プランとして疑問が付く場合はご相談ください。
8. 作中登場人物である「オドー」のイントネーションは、「茶道」とか「華道」などと同じでお願いします。

◆次ページから台本文です。

【恥辱に耽る者フィリス EX06B01】

全裸となった私は、深夜の屋敷の廊下を一人、熱に浮かされたように歩き、やがて執務室の前に辿り着いた。

そのドアは私を待ち侘びていたかのように静かに開く。

ドアを開けたのは予想に違わず、あの文官の男だった。

男は、私の全身を舐めるように見回し、口元でクヒヒ、といやらしく笑った。

男の招き入れるような身振りに促され、私は部屋の中へと入って行く。
夢遊病か、催眠にでも掛かったかのような、ふらふらとした足取り。

だが、これは間違いなく私の意思の為せる業だった。

他の誰でもない。

私がそうすべきだと、そうしたいと考え、ここに至ったのだ。

私の背後でドアの閉まる音がした。

続いてカチリ、という鍵の掛かる音。

シンと静まり返った室内。

薄暗い灯。

インクと紙の臭い。

全ての事物が私の感情を昂ぶらせるためにあるのではと思った。

ここに歩いて来るまでの間に、私の身体は十分に発情し、顔は上気し、頭は、いやらしい考えでいっぱいになっていた。

(声を震わせように。おずおずと。▲飲▼の部分は息を飲む感じの言い淀み)
「あ……の……、わ、私を、調教して、ください……。」

ろしゅ……▲飲▼……、露出、奴隷に……、調教、してください……」
(ここまで)

それは、あの日記の中の女が言わされていた言葉だった。

生活に窮し、男に身体を売るしかなかった女が、変態的な嗜好を持つ日記の主によって、無理矢理口にさせられた屈辱的な台詞。

それを私は、自ら望んで口に出していた。

調教されることが……、調教してもらおうことが……、私が心の奥底で密やかに生み、育ててきた、倒錯的な願望だったからだ。

少し前まで、この男を殺して口封じをしようとしていたことなど綺麗に忘れ、今はこの背徳的な悦楽を、もっと味わいたいと思ってしまっている。

男は私のその恥ずべき願いを聞き入れる前に、私の覚悟を尋ねた。

男の声にはすでに奴隷の主人としての風格があった。

未熟な奴隷を言い含め、手懐けるための、優しくも威圧的な口調に、私は小さいながらも、ハッキリと答えるのだった。

(直前に若干言い淀むような息を入れてください)

「……はい」

(ここまで)

もう後戻りできない……。

自分がそう返事をしたことで、私は確かに、もう引き返すことのできない底なしの沼にハマリ込んだという絶望と、それに耽溺する自分を感じていた。

足を開け、と男が言い、私は短く、はい、と答えた。

声や表情には出ていない筈だが、私は既に命令される悦びに打ち震えていた。誰とも知らない一介の文官からの命令に、言われるがままに従ってしまう自分に興奮する。

男は私の目の前に椅子を置いて、そこに座った。
靴を脱いで足を組み、私の太腿の間にその足を差し挿れてくる。

腰を落とせ、と男が言い、私は短く、はい、と答えた。

ゆっくりと膝を曲げ、腰を下ろしていく。

差し出された男の爪先は、今や私の濡れそぼった陰部に、当たるか当たらないかという微妙な位置に据えられていた。

もう少し腰を落とせばアソコに当たる筈……。

だが男には、敢えてそれを触れさせないようにしている節があった。

男の指示が鋭く飛んだ。

(やや震え、怖がっている感じで。ためらいがちに)

「はい……。分かりました……」

(ここまで)

私は言われるままに、自分の乳房に触れ、ためらいがちに愛撫を始めた。

(小さな喘ぎ。大袈裟過ぎないように。しっかり発声せず息多めで)

「あ……、ふ……、は……」

(ここまで)

胸に触れるだけで、私の肌は敏感に励起し、私をゾクゾクと興奮させた。

自然と儚げな喘ぎ声が漏れ出してしまう。

いつもなら、そんなことあるはずがないのに……。

今の私は、身体中、どこを触られても感じてしまうのではないか……。

男は、今の無様ななりを理解しているのかと、嘲るように言って私をなじった。

（心情寄り…僅かに昂ぶる感じで。やや早口に）
そんなこと、分かっていない訳がない。

私は全裸で、足をガニ股に開き、自分の胸を揉みしだきながら喘いでいる。
あまりに下品で、淫らな自分の姿に眩暈を覚えるほどだ。

（ここまで）

私がそれを口に出して認めると、男は爪先を上げ、足の指で、私のアソコを無造作に刺激した。

（喘ぎ声。不意の刺激に驚くように。高めの音程で）

「あうっ……！」

（ここまで）

思わず大きな声が出る。

情けない、メスの鳴き声だ。

自分が足の指などで感じ、喘ぎ声を漏らしてしまったことに動揺する。

愛液でしっとりと濡れた私のアソコを、音を立てて弄り上げながら、いつからこんな有り様になっていたのかと、男は私を意地悪く問いつめた。

（感じてしまうのを我慢するように）

「あ……、は、始めから、です……」

部屋を出たときから、ずっと、期待して、興奮、してました……」

（ここまで）

今にして思えば、そうだとしか思えない。

あの淫らな日記によって、この男による連日の凌辱によって、私の心と身体は、すっかり出来上がってしまったのだから。

男が矢継ぎ早に問いかけ、私がそれに答える。

そうしながら私は徐々に、自分の歪みきった性癖を自覚していくのだった。

（▲速▼部分は過呼吸になっているような速く浅い息を大袈裟にください。たまに途中で唾を飲み込むような演技が入るとより良いです。この場面では呼吸音の裏で男から質問を浴びせられている体裁なので、それっぽい間尺でお願いします。かなり興奮している状態なので、息と同様に台詞も早口でお願いします）

「▲速▼速▲速▼は、はいそうです。▲速▼速▲速▼う……あ、はい……。そうです。▲速▼速▲速▼ああ……、は、はい……。始めから、いやらしい命令をされたかったです。……私は、命令されて、いやらしいことが……、恥ずかしいことが、しつ、したかったです！▲速▼速▲速▼そ、そうですう！ろ、露出奴隷に、なりたいですう！」

（ここまで）

男は私のことを最低の露出狂女だと吐き捨てた。

最低、という響きが、私が秘めたマゾヒスティックな心を躍らせる。

そう呼ばれるだけで、自分が、最も低い位置に落ちぶれてしまったという哀愁が漂うようだった。

私のその内なる悦びを見透かしたように男が嗤う。

まずは自覚が大事なのだと男は言い、私のために用意された、最低な自己紹介の文言を繰り返すように命じた。

（心情寄り…震えながらも喜んでいるふうに聞こえるように）

ああ、ひ、酷い……。なんて酷い自己紹介なんだ……。

（ここまで）

そう思いながらも、これは命令なのだから仕方がないと言い聞かせ、私の最低な自己紹介を口にし始める。

（勢い良く言い始めようとするものの、自分で情けなくなり言い淀む）

「……わ、私は、さ、最低っ、最低の……うう……」

（ここまで）

胸を揉むのが疎かになっていた私に対し、男の叱責が飛ぶ。

(叱られないように必死に。つつかえながらも何とか言い切る)

「はっ、はい。すみません！」

……私は、最低の、変態……淫乱、露出狂女、です……」

(ここまで)

さらに胸の揉み方が甘い、乳首もいじれとの叱責。

(喘ぎ声)

「は、はい！……んっ、あっ……、んんっ……んんん！」

(ここまで)

そうして私が、敏感になった乳首から刺激を得るのに夢中になると、今度は自己紹介が止まっているとの怒声が容赦なく飛んだ。

(始めは淡々と始まり、徐々に興奮して早口になる。▲速▼の息は速く浅い息を大袈裟に)

「……私は、最低の、変態淫乱露出狂女です。

▲飲▼……私は、最低の変態淫乱露出狂女……です……」。

私は最低の変態淫乱露出狂女です。

▲速▼速▲速▼私は最低の変態淫乱露出狂女です。

▲速▼速▲速▼わっ、私は最低の、女……。露出狂女……。

変態で……淫乱な、さ、最低の女、最低の女です！

露出好きの、へっ、変態女っ……！」

(ここまで)

自らが口にする言葉で勝手に興奮するあまり、言葉を乱してしまった私を男が叱り付ける。

私は胸の愛撫を一旦やめ、男に促されるままに、自分の女性器の真下に据えられた男の爪先を覗き込んだ。

（▲深▼部分は長く深く速い呼吸音。走り終わった後のように、酸素を求めて肺を大きく上下させているイメージ。この場面ではその呼吸の裏で質問を聞いている体裁なので、それっぽい間尺でお願いします。台詞も息に合わせて、息苦しそうに喘ぐ感じをお願いします）

「▲深▼深▲深▼び、びちゃびちゃに、濡れてます。▲深▼深▲深▼私が、……

▲飲▼……擦り付けたから、です……」

（ここまで）

間抜けな口上を述べながら、私は無意識のうちに、より深く腰を落としてしまっていたのだろう。

腰を落とすことで、そこに据えられた足の爪先から刺激を得ようと、みっともなく、ヘコヘコと腰を振った……。

いや、無意識でというのは嘘だ。

（心情寄り…余裕をなくした感じで情けなく。やや早く）
だって、しょうがないじゃないか。

使ってくれと言わんばかりのそんな位置に。

始めから、何故そんな中途半端な位置に足を置くのかと、恨めしく思っていたのだ。

（ここまで）

アソコを擦り付けた私に対し男は、俺がそんな命令をしたかと、何故お前はそんなことをしたのかと、侮蔑を込めて糾弾した。

（最初は慌てて早口で。後半は言いづらそうに小声になっていく。最後は不意を突かれての喘ぎ声）

「し、してません。私が勝手にやりました。

き、気持ち良くなりたくて、腰を、振りました……。……んあっ！」
（ここまで）

男が足を跳ね上げて私のアソコを蹴り、私は無様な嬌声を上げた。
いやらしい愛液が湛えられた私の秘所からは、ボタボタとそれが滴り落ち、
男の足と、その下の床を濡らす。
追い討ちをかけるように、男は器用に足の指を操り、私の割れ目を開いたり、
クリトリスを擦ったりした。

これがいいのか？……と、男がいやらしい笑みを浮かべる。

（喘ぎ声。興奮して速く）

「ああっ！ あっ、いいですっ！ いいっ！」

（ここまで）

私が喘いで身をくねらせていると、男はさっと足を引いた。
そして、信じられない程いやらしい台詞を、私に復唱するようにと強いるの
だった。

（震える声で）

「わ、私は、男の人の爪先で、マン……マン擦りをする、……◆飲◆……馬鹿
な変態女です」

（ここまで）

男は言った。
言い淀むなど。

俺が言えと言ったら何も考えずに口にしろと。
繰り返してじっくり反芻し、そうやって自分の人格に染み込ませるのだと。

（呆けたように。実際は違います但催眠にかかったかのようなイメージで）
「……はい。分かりました」
（ここまで）

そう答えたあと、遅れて、背筋をゾワゾワとくすぐる悪寒が走った。

（心情寄り…焦った様子で。後半は少し嬉しそうな含みを持った震え声で）
こ、これ？ちょ、調教が、始まってるんだ。

私きつと、こうやって、調教されていくんだ……。

（ここまで）

次に男が指示した言葉は、私には想像も付かない卑猥な内容だった。
その淫らで下品な言葉を聞いて、私は居ても立ってもいらなくなる。

（最初はやや小さめの声で、後になるにつれ感情を昂ぶらせるように）

「愚かな私にオドー様の膝を使ってオマン擦りさせてください。」

愚かな私にオドー様の膝を使ってオマン擦りさせてください♡

愚かな私にオドー様の膝を使ってオマン擦りさせてください♡♡

愚かな私にオドー様の膝を使ってオマン擦りさせてください♡♡♡

（ここまで）

愚かな私は、言われるがまま、この男、オドーに指示された言葉を復唱して
いた。

オドーが言うように、何度も唱えることで、そんな言葉を紡ぐ最低な女の乱
れた情欲が、自分の中に染み込んでいくように感じた。

●私がそうしたいと……、そんな願望を抱いていたという事実が、まるで、最
●初から存在していたかのように感じるようになる。

オドーが足を組み直し、ローブの裾を捲って片膝を出す。

鋭角に曲がったただの武骨な膝関節が、私の目には非常に艶めかしい物に映っ
ていた。

（心情寄り…大分感極まった感じで）

●ああ、し、したい……♡オマン擦りがしたい♡このエロい膝に、オマンコ
●を、思いつきり擦り付けたい♡……♡

（ここまで）

よし、やれ……と、短い命令が飛んだ。

私は躊躇なく進み出ると、差し出されたオドーの足を深く跨ぎ、自分の濡れそぼった割れ目を、そこに押し当てて擦り始めた。

ゴツゴツとした膝の皿で、勃起したクリトリスが押し潰されると、その度に電撃が走ったような刺激がもたらされる。

私はたちまちその行為に夢中になった。

そんな私に向かって、またもいやらしい台詞が強要される。

（▲喘▼部は喘ぎ声混じりの息演技。ここではこの間に復唱の指示を聞いている体裁なのでそれっぽいい間尺でお願いします。以下同）

（夢中な様子で。早口気味に）

「……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼」

膝オナニー気持ちいい♡オマンコすりすり気持ちいい♡

膝オナニー気持ちいい♡オマンコすりすり気持ちいい♡

膝オナニー気持ちいい♡オマンコすりすり気持ちいい♡

（ここまで）

オドーに促されるまま、私は恥知らずな台詞を、馬鹿のように何度も繰り返す。

（一行ごと音程に起伏を付ける（中・高・低・中）。早口。最後だけ溜め気味で声も大きく）

「……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼」

救国の英雄フィリスは今日から貴方のシモベです。

救国の英雄フィリスは今日から貴方のシモベです。

救国の英雄フィリスは今日から貴方のシモベです。

救国の英雄フィリスは、今日から貴方の、シモベです！」

（ここまで）

（心情寄り…震えと息多め。声はやや小さく。静かに昂ぶった感じで）
あ、ああ、そうだ。今日から、わ、私はこの男のシモベになるのだ。
それは決定事項で、覆しようのない、事実なんだ。

（ここまで）

（最初はやや無機質で棒読みに近く。二度目はハツとしたように。三度目は囁くように。四度目は感極まり嬉しそうに）

「……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼……▲喘▼」

私はこうしてマンコを擦ることしか能のない愚かな女です。

私はこうして、マンコを擦ることしか能のない、愚かな女です。

私はこうしてマンコを擦ることしか能のない愚かな女です。

私は、こうしてマンコを、擦ることしか能のない、愚かな女です♡」

（ここまで）

二度目の復唱で言葉のとおりである自分を自覚し、四度目を言い終わるときには、何故この人は、私の恥ずべき本質を言い当てることができたのかと、畏敬の念すら覚えていた。

（心情寄り…やや速め。息多め。声はやや小さく。静かに昂ぶった感じで）
そうです。そのとおりです。

私はマンズリが大好きで大好きで堪らない、オナニー中毒の、それしか能がない、馬鹿なドスケベ女なんです。

（ここまで）

オドーは私の手を払いのけると、ピンと張った私の乳房を驚掴みにし、下から持ち上げるようにして揉みしだき始めた。

（喘ぎ）

「んん……、あっ……♡んっ……、んんっ♡」

（ここまで）

胸の弾力をしばらく愉しんだあとは、片手を腰に回し、私を抱き寄せ乳首に吸い付いてくる。

自分で揉むのとはまるで違う。予測不能な刺激によって、私はしばし声もなく喘いだ。

ない誰かに肉体を弄もてあそべ

ほんかい
本懐を見出して
みいだ
いた。

（心情寄り…切なそうに）

もっと触さわって欲しい……。

孵なぶって欲しい……。

男に可愛がられたい……。

(1111まで)

オドーは乳首ちくびから口を離し、片足ひだを上げて組み直す。

両手で私の腰を引き寄せると、膝の皿に再び私のアソコを当てがった。
そして短く無造作に、跨がれ、ただけ命令した。

そう言われたものの、組まれた膝ひざの位置は高く、それを跨またぐとすると床にゆか足あしが付かない。

私は体重なかの半ばをオドーの膝ひざに預けるようにし、爪先つまさき立ちとなって、ようやくその上に跨またがった。

オドーの肩に手を置き、懸命にバランスを取ろうとする私に対し、オドーは下から膝を突き上げて振動を与え、容赦なく責め始めた。

(喘ぎ)

「んっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ……♡んんっ……♡んっ……♡んっ……♡んっ♡」

(1) 10月

快感の波に耐えながら、私はオドーの命令に従い感謝の言葉を口にする。

（▲速▼部分は過呼吸のような速く浅い息遣い演技。感情はほぼ極まっている状態。不規則に与えられる刺激によって、所々言葉が乱れている感じ）

「▲速▼速▲速▼速▲速▼速▲速▼」

いい淫乱ん♡女のお♡オナニーを、てっ、手伝っていただっき、ありがとうござっ、ますっ♡

淫乱女のっ♡オナニーっ♡手伝っ♡……てえただきっ♡ありがとうっ♡ござい、ますうっ♡

▲深▼淫乱女のオナニーをお♡手伝ってへ♡いただひい♡ありがとうっ♡ございまふう♡」

（ここまで）

（心情寄り…一転して落ち着き、恍惚とした感じ）

オナニー……。

オナニーなのだこれは……。そうか。

肌を寄せ合っているが、気持ち良くなっているのは、一方的に、私だけ。オナニーを、させていただいている……。

ありが、たい……。ありがたい……。

（ここまで）

（▲深▼部分は長く深く速い呼吸音。走り終わった後のように、酸素を求めて肺を大きく上下させているイメージ。喘ぐのに疲れ切っているが、ここでは肉体的な責めは一旦落ち着いているお陰で、しっかり発音できている状態）

「▲深▼▲深▼淫乱女のオナニーを手伝っていただき、ありがとうございます……」

（ここまで）

最後には心の底からオドーに対する感謝の気持ちこもが籠こもっていた。
静かな部屋の中、ひゅーひゅーこきゅうおんと呼吸音が響くひび。

（心情寄り…いっぱいっぱいな感じ）

もう……。限界だ……。

気を抜くとイッてしまう。

足で身体からだを支えられなくなってしまう……。

（ここまで）

オドーがまた、私に酷い台詞を強要する。

（心情寄り…徐々に盛り上がる感じ）

ああ、そ、そんな台詞……、そんな酷い台詞……。
 言いたい……。い、言ってしまう……。！

(「じ」まで)

（最初は言い淀みつつ、再び興奮のボルテージを上げ早口になっていく）

「私は、命令してもらわないと、オナニーもできない、最低の馬鹿女です。」

私は命令してもらわないと、オナニーもできない最低の、馬鹿女です。

私は命令してもらわないとオナニーもできない最低の馬鹿女です。

私は命令してもらわないとオナニーもできない、最低の、馬鹿女、です！」

(1111まで)

（心情寄り.. 嬉しそうに。心酔したように）

そう、そう、……そうだ。

こんな気持ちのいいこと。

馬鹿な私ではきっと思い付きもなかった。

この人に命令してもらわなければ。

私は満足に自慰すらできない、最低の馬鹿女なのだった。

(「」まで)

（▲速▼部は過呼吸音。半狂乱ぐらゐに振り切った演技でお願いします）

「速▼速▲速▼速▲速▼速▲速▼」

オドー様！変態の馬鹿女をどうかイカせてください！

オドー様あ、変態の、馬鹿女をどうか……、どうかイカせてください！

オドー様、ああ、オドー様オドー様……！！

ヘンツタイの、馬鹿女の私を、どうかお願いします！

イカせてくださいませ！お導きくださいませ！」

(「」まで)

「またも無様な興奮により、大切な口上を乱してしまった私に対し、オドーは落第の判を押す。」

「出来ない奴隷には、これからもたつぷりと調教が必要だと……。そう言っ、オドーは激しく膝を揺すり始めた。親指でクリトリスを弄り、これでもかと私を責め立てた。」

（最高潮に興奮した様子で）

「ああっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡おっ、お願いします♡」

「調教おっ♡してっ♡してっ♡してっ♡お願い♡♡」

「騎っ、騎けてええ♡」

「奴隷に、最低の奴隷にしてください♡♡」

「ああっ♡あっ♡あっ♡あっ♡……は、はいい、はいい！」

「……イイ♡イイ♡イキます♡イッちやう♡イッちやう♡もうイクッ！」

（ここまで）

「オドーから絶頂の許しが出ると、私はすぐさま無様に果ててみせた。」

「これまで堪えていたものが一気に解き放たれる。」

「ギリギリで身体を支えていた爪先が宙に浮き、全ての体重が会陰部へと押し掛かる。」

「押し寄せる浮遊感に、止めどない多幸感に、私は前後不覚となるのだった。」